慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	宮川透・中村雄二郎・古田光編 近代日本思想論争
Sub Title	
Author	野地, 洋行
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1963
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.56, No.9 (1963. 9) ,p.882(94)-
JaLC DOI	10.14991/001.19630901-0094
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19630901-0094

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

宮川　透・中村雄二郎・古田　光編
『近代日本思想論争』

本書は「思想史研究会」のメンバーが、三つの主要な視点から、近代日本の思想的論争を整理、再構成したものである。したがって問題設定そのものの中に著者たちの共通の問題意識をある程度まで、よみとることができる。その視点の第一は、民主主義の問題であり、第二は、伝統と近代化の問題であり、第三は、近代的知性の問題である。第一の民主主義の問題は、当然のことながら、主として憲法と天皇制の問題を軸として追求されている。自由民権運動、大正デモクラシー、第二次大戦後の民主化は、三つの日本の啓蒙時代であるといわれるが、それぞれの段階での論争の中に、民主主義の問題がどのように性格規定をうけて現われたかがここでは主題となっている。

第二の伝統と近代化の問題は、これまでくりかえされてきた、単純な「欧化主義と国粋主義との不毛な対立」をのりこえて、近代化の中に生かされるべき「伝統」と、伝統の中に遂行されるべき近代化とを、明確に把握しようという意図に裏づけられている。伝統と近代化の問題は、明治維新の尊皇攘夷論と佐幕開国論以来、日本資本主義の歴史の中で、たえず錯綜してあらわれており、決して単純に伝統イコール反動的でもなければ、近代化イコール祖国喪失的でもないのである。伝統＝近代化の問題は、日本＝西洋、民族＝世界（もっと詳しく分析すればそれは、封建遺制＝資本主義化、日本資本主義＝欧米なみの先進資本主義化、日本民族＝社会主義化という広大な問題をふくんでいる。）というように、重なりあうが決して一致はしない別の対立を時に代表し、時にふくむのであるが、新しい社会観をうちたてるためには、まず、それを「欧化主義と国粋主義の不毛な対立」から解放しなければならないのである。その点、そこからさらに前進するためには、ナショナルなものを「階級」や「人類」や「市民」との関係の中で明らかにする必要があるという古田氏の指摘は正しいが、いぜん、それは指摘にとどまった。

宮川氏が編者となっている第三章はむしろ問題中心的に、近代知性の諸問題がとりあげられている。第一が「教育と宗教の衝突」論争、第二が、自然主義をめぐる論争、第三が西田哲学の問題、第四が主体性論争、第五が大衆社会論をめぐって、である。

さて、近代日本思想の問題は天皇制ファシズムと、それに支えられた日本近代社会への批判ないし憎悪を媒介として取り上げられることが多かったために、過去の、日本的な思想に対しては、全面的な批判が多かったが、日本資本主義の再生を契機として、「世界の中の日本」の独自な性格の再認識が要請されるようになった。それは日本の帝国主義の復活をねがうものの側でも同じであるが、社会主義の中に新しい社会観をもとめるものにとってことにそうである。本書の第二章や、第三章の西田哲学の評価などはその明白な反映とみられる。

本来、論争史の意味は、それによって従来の問題点が明らかになり、進むべき新しい道がおぼろげにでも浮び上るところにあるはずである。十三人の著者によるこの共同研究には、方法の相違は当然としても、単に文献史的な記述もみられ、必ずしもこれによって今後進むべき道がさし示されるとは思われないが、それは一つは編者のいうように「性急な論断をさけ」たためであろう。（青木書店・一九六三年六月刊・B6・三六六頁・六八〇円）

＊　＊　＊

—野地　洋行—

大河内一男編集・解説
『社　会　主　義』
—現代日本思想大系15—

本書は、現代日本思想大系の一巻として、大河内一男氏の編集・解説により、日本の「社会主義」をその時々の文献によって歴史的に跡づけようとしたものである。

全体は三部からなり、第一部は「社会主義者の歩んだ道」として荒畑寒村、木下尚江、堺利彦の稿をえらび、第二部は「社会主義の理論とその展開」として幸徳秋水、片山潜、社会民主党宣言、平民新聞論説、山川均、赤松克麿、森戸辰男、江田三郎、向坂逸郎の稿を、第三部は「社会主義と社会問題」として横山源之助、松岡荒村、堺利彦、片山潜の稿をえらんで、それに大河内氏の「日本の『社会主義』」と題する長文の解説と著者略歴や社会主義運動略年譜を付したものである。

以上の採録された執筆者をみれば理解されるごとく、第一部は「わが国の社会主義運動の生成・変転の過程」を、第二部はこれまでの社会主義運動の歴史の上で、「画期的な役割と影響力をもち、運動の方向を決めてきた各時代の指導的理論の諸典型」を、第三部は「社会主義者たちがそれぞれ当面した各時代の社会問題について扱った論評」を配列したものである。従って、各論文は一部をのぞき、これまでくり返し読者の眼にふれられてきたものであり、ここであらためて解説論評する要はないが、編集上のことで若干言及しておく必要があるようである。

例えば、現代日本思想大系としての「社会主義」を考える場合、本書のような思想史、運動史的な文献史、しかも明治期中心の編集に何かとまどいを感ずる人が少くないのではないだろうか。たしかに編者のいわれるとおり、日本の「社会主義」は分裂とその中での左派の優位が一つのサイクルのごとくくり返され、しかも明治期がその第一期で、幸徳や片山らの運動はその後の運動家も凌駕しえないような純粋で気魄にみちたものであったことは否定できず、しかもそこには明治大正昭和三代を貫ぬいて「社会主義」の支えとなってきた平和主義が根幹となっていたという点で、明治期は日本の「社会主義」の一つの雛形といえないことはない。しかし、編集の点で戦前とくに明治期の論稿に比重が傾きすぎたこと、それを年譜で補うなどしているが、解説自体も採録論文中心に叙述されているので、明治期に筆が偏りすぎたきらいは否定しえないようである。だが、第二部を中心に、夥しい過去の文献の中から、できるだけ一貫性をもったものにまとめあげようとした努力はくみとれ、編集の苦労は十分察しられる。そのようなことから、若干の欠陥はあるとしても、社会主義の足跡は大体知りえ、みかたはいろいろあろうが、そこから将来の展望もなしうるものといえる。

このように、一つの大系としてあるものを一冊の書にまとめようとする場合、若干の欠陥がともなうことは詮方ないことであり、むしろ、数十年たった今日、ここに採録された歴史的文献をくり返し読みなおしてみても、なおそこに新鮮なもの、往時を彷彿せしめるものがあることに留意すべきであろう。「社会主義神髄」（幸徳秋水）、平民社の非戦論、「国家としての『君が代』」（松岡荒村）、「無産階級の方向転換」（山川均）など、いずれも論旨鋭く、しかも格調の高いものであり、これらだけからでも、一九〇一年の社会民主党以来の、先人の純粋な社会主義への努力の跡はくみとれることと思う。日本の近代史や現代思想を学ぶものにとって一読に価する書物といえる。（筑摩書房・一九六三年六月刊・四六判・四七八頁・四五〇円）

—小松　隆二—